

死の選択をテーマにした衝撃作『PLAN 75』 日本で世界で異例のロングラン!

75歳以上の日本国民が、自らの死を選択できる制度“プラン75”——。

制度を利用すると、支度金10万円が支給され、旅でも美食でも使い道は自由。安楽死のその日まで、サポートスタッフが電話相談に乗ってくれ、中途解約もOK。一緒に火葬する合同プランなら火葬代は無料。事前に葬式用の遺影写真、フェアウェルフォトも撮ってくれるという、あの手この手のサービスも……。

これ、映画『PLAN 75』の架空の設定なのだが、少子高齢化が進む日本で、あってもおかしくないと感じるほどリアルに衝撃的なストーリーだ。

日本では今年6月17日に公開され、先日のハワイ国際映画祭でも上映された。脚本・監督は早川千絵さん。長編映画の制作は初めての、無名の新人監督の作品ながら、6月の公開以来、日本

全国でいまだにロングラン上映が続き、3億3千万円以上の興行収入を上げている。

世界でも20カ国で上映され、来春には、ロサンゼルスやニューヨークで上映される予定なので、ハワイでの公開も待たれるところだ。

世界各地の30以上の映画祭にノミネートされており、今年のカヌ映画祭では「ある視点」部門に出品、特別賞に輝いた。アカデミー賞の日本代表にも選出され、来年3月の発表が期待されている。

そんな話題作の映画『PLAN 75』、ハワイ国際映画祭での上映後、早川千絵監督にインタビューした。



早川千絵 監督 インタビュー

弱者が切り捨てられるという危機

早川さん自らが脚本を書かれた作品ですが、「75歳以上で死を選択できる」という設定には、特別な動機があったのでしょうか。

「2000年代に入ってから、日本では“自己責任”という言葉が幅を利かせるようになり、社会的に弱い立場の人に風当たりの強い、追いやられていくような風潮が広がっていった気がします」

新自由主義が民営化や規制緩和を推し進め、自己責任のもとに競争を強いられる弱者が負け、失敗した人は浮かび上がれない格差社会が広がってしまった。

「そんな中、2016年に障がい者施設での殺傷事件が起こりました。45人も人が刃物で切りつけられた殺人事件で、犯人は、役に立たない障がい者が社会に不要な存在だと犯行に及びました。人の命を生産性ではかり、社会の役に立たない人間は生きている価値がないとする考え方は、犯人特有のものではなく、すでに社会に蔓延していると感じました。政治家や著名人による差別的な発言も相次いで問題になっていましたし、人々の自己責任の押し付け合いや、不寛容さがこのまま加速していけばどうなるだろうと、強い恐れを感じました」

下流老人や老害、高齢者虐待、介護放棄など、家族や社会の機能不全を表すコトバがメディアを賑わしていた。「このままエスカレートすれば、“プラン75”のような制度は生まれ得るのではないかと思うほどの危機感を持ち、そんな未来は迎えたくないという想いが、この映画を作る原動力になりました」

主演は傘寿の倍賞千恵子さん

物語の中心となるミチ役は、寅さんの“さくら”役でおなじみの名優、倍賞千恵子さん。主演は倍賞さんと、はじめから決めていたのですか。

「はい、はじめから倍賞さんをお願いしたいと考えていました。歳を重ねても佇まいが美しく、柔らかさも凛としたところも併せ持っておられる方です。演技はもちろん、声もとても美しく。出演のお願いと台本をお送りしたら、一度会って話しがしたいと言われてまして、お話しした上で快諾してくださいました」

倍賞さん曰く、「はじめはなんてひどいストーリーだと思ったけれど、物語の終盤でミチが太陽の光を浴びる場面があり、ミチのその時の決断を監督とお話して心打たれ、出演を即決しました。映画の撮影中、早川監督は時折ふわっと羽ばたくように近寄ってきて、シーンや役の説明をしてくだ

さった。するとミチの気持ちが入ってきて心が深くなり、役が立ち上がってくるようでした」

倍賞さんが演じた角谷ミチは78歳。夫と死別してひとり暮らしで暮らしている。職場でラジオニュースが告げている。「75歳以上の高齢者に、死を選ぶ権利を認めて支援する制度が国会で可決施行されました。前例のない試みに世界から注目が集まっています」と。

ある日ミチは、高齢を理由にホテルの客室清掃の仕事が突然解雇されてしまう。賃貸の団地も退去しなければならなくなった彼女は、“プラン75”の申請を考え始める——。

「セリフで多くを語る映画ではないのですが、倍賞さんは目や手の動きだけで悲しみや恐れ、感情を繊細に表現してくださいました。ここはノーメイクねと、ご自身からメイクなしのすっぴんで撮影に臨まれた場面もあります。ワンテイクOKのことが多く、さすがでした」

撮影中は80歳の傘寿だった倍賞さんは、映画公開直後に81歳の誕生日を迎えた。

シワが刻まれた素顔のアップは、人が老いることの現実を活写するとともに、歳を重ねたからこそその深み、尊敬をいかに表現していた。光と影の中で映し出される倍賞さんは、美しくとても気高かった。

高齢者排除に無自覚に加担する若者

現在、日本で一人暮らしの高齢者は600万人以上いる。2025年には、国民の5人に1人が75歳以上になる超々高齢化社会に突入する。自殺者の4割が高齢者で、厚労省の調査によると、介護を受けている高齢者の3人に1人は、「死にたい」と考えたことがあるという。日本のお年寄りを取り巻く環境は厳しさを増している。

「PLAN 75」に出てくる若者たちも、ミチたち高齢者に一定の距離をとり、当初はビジネスライクな関係しか持とうとしなかった。

NHK朝ドラ「ひよっこ」や大河ドラマ「青天を衝け」などの名演が目される磯村勇斗さんは、市役所の“プラン75”の申請窓口で働く職員役。ブルーリボン新人賞に輝く若手女優の河合優美さんは、死を選んだお年寄りを最期の日までサポートするコールセンターのスタッフ。

優しく気さくにお年寄りに接してはいるものの、“プラン75”の制度になんの疑問も持たず、無自覚ながら高齢者の排

除に加担していた。

それがミチたち高齢者と話しをしたり触れ合うことで、人間的な感情に目覚め、人を思いやる想像力を取り戻してゆく——。私たちは、人に迷惑をかけてはならないと教え込まれて育ったがゆえに、困った時には助け合うのが人間として当たり前前の姿であることを忘れてしまったのだろうか。干渉しあわないことが美徳となってしまったのだろうか。

「大学生を招いて試写会をしたことがあったんですが、お年寄りの話題もカラオケなどの楽しみ方も若者とおなじみなんです。って。私たちだって歳をとるんだから、生きづらい社会にはしたくない、と感想を話してくれました。この映画は、観る方の年齢や立場によって、刺さるポイントはそれぞれ違うと思いますが、スルーしたり思考停止にならず、それぞれが受け取って想像力を膨らませてほしいです」

一条の希望、観る者が結末を創る

『PLAN75』、この映画は答えを示さない。受け取る人次第のような結末で、終わりの始まり、みたいな余韻の中に浸っているよう感覚だった。ただ、最後に、茜色の太陽の光を浴びた倍賞さんの横顔に、一条の希望を見たような気がした。

「物語や主人公の心情を、懇切丁寧に説明してくれる昨今の日本映画を見慣れている人がこの映画を観たら、少し戸惑われるかもしれませんが、でも白黒つけられない疑問やナゾを心に留めたまま、さまざまな想像力を膨らませて、登場人物に思いを馳せるのも映画を観る醍醐味ではないでしょうか。私は映画を観る人の理解力や感受性を信じています。一人ひとり、自由な感性で映画を解釈することで、観客にも映画の共作者になってもらいたいです。『PLAN 75』が私の手元を離れ、無限に形を変えていってくれることを願っています」

(取材・文 奥山夏実)

ハワイ国際映画祭

今年で42周年を迎えるHIFF (Hawaii International Film Festival) は、ハワイ大学の教育・研究機関「イーストウエストセンター」のプロジェクトとして発足。映画を通じてハワイと太平洋の国々の文化の架け橋となるべく、近年では毎年5万人以上の映画ファンが鑑賞。米国でも有数の映画祭となっている。

特徴としては、アジア・太平洋地域の長編映画、ドキュメンタリー、短編映画、ハワイの映画作家による映画を上映。

コロナ禍の影響で、3年ぶりの対面式開催となった今年は、11月3日～13日、ホノルルの各映画館で上映。オンライン上映を含めると、37カ国が参加し、230本近い映画が公開された。日本からも18作品の邦画が上映された。

